## 銭 鐘 書

そのものについて口改めて書く。ここでは、そこに引かれた銭鐘書『談芸録』をとりあげた 引用文の表記は改めた) 九五五年十月、荒井健「李賢の詩―特にその色彩について―」(中学文学報・第三册)が出 、井氏は著者を人博学と智 **藁をもって聞こえた鉾鐘書氏>とよび、次の文を訳出する。** (725

は 道も生する。皮膚にこわやみ・たましいに譬く境地、心をひどく痛め・ ない。だからその文脈は忽ち起って忽ち結ばれ、忽ち変化し忽ちとだえ、複雑に出入しわき ものなのだと。 かも情意が買き、通され、 ならば秋の動物の毛で之も十分見分けるが、 遠くならば 車一ぱいの薪も見つけることは出来 17 明珠が入り乱れて落ちるようである。 かわがわ考えていた―― ( 李) 長吉の文章の根本原理は近視の人の視力と同様で、 霊妙の気分が深く祕められ外にただようのとは、 「離騒」の甚だ幻想的に次々と展開しながら、し 骨を刺すほどの文字 もうはっきい別の 12

の結論を出すど、第一に、歌われている事柄全体についての眺望、槪観が得られない。第二に、 そうしてこうつけ加える人特に彼の長箭にぴったりあてはまる。この銭氏の言葉によって一心

\_\_

じめて手にしたとき覚えるであろう戸惑いがよく説明されてある、と思った。銭氏の他の一条が 注に引かれる。 #F 成的 である。第三に、美辞瞬句の積み重なりから出来ている、ということになるだろう。> 特徴をかなりよく衝いている。ことに、他の詩人の作品を読みなれた人が賀の集をは

く見つけ出 をひろく読み、理解力するとく、一人の作者を文学史全体のとの位置に据えるべきかを 素早 漠がにわかに移るように、 延速に移り変る。だから部分のみ見つめると言葉づかいは重く疑固しているが、 あっても流動性を具えているのである。..... 千里もある一筋道を突っ走るのとはちがつのだ。 (蘇)東收の (詩が) 満々とたたえた泉の 源のように 詠ずろと、 … (彼の詩における)各分子の性質は、どれも重く凝って堅固だび、 し、それらを簡潔な文で表現できる人だな、と思った。同時に、 気体のように巾や動く。これ口(韓) 昌祭の(詩が)長江の秋の流れのように、 至る所から勇出するのともちがつのだ。これは氷山のたちまち倒れ、 その勢は細かく許けに石塊をさし口さんで真直に進み、 この人は李賀はそれ 全体の運動は、一方 全体として 固体では ゴビの砂 (726)

書局文史叢刊)のつち、二0ページ足らずは李賀の詩について論じてある。短いものだが驚扱の 議論が多く、非常に参考となった,> 荒井注<銭氏(γ~×)は作家兼批評家で、その詩話 「該芸録」(民国三七年六月初 版 開

ほと好きではないのだな、

と感じた。

九六六年三月十七日、銭氏の11の書へ香港・竜門書店・一九六五年八月影印重版 )を読むこ

早く気づいていたのである。・ V そして翌十八日にもへ終日 銭氏の談芸録を耽読>とした 天無功」をものしたとき、千年の閒この語に深く注目するもののないことを怪しんだび、銭氏は 方<br />
・筆補造化天無功を質の詩の根本とすること、もっとも我が意を得た。<br />
さきに小論「筆補造化 の『談芸録』を読む。名を聞いて久しかったが、渇を医すことができる。字質を論ずるもののう とができた。日記に次のようにしるす,<第二次入学試験の採臭,午後九時終る。帰って我鍾書 ためている。

ってゆく。そこが面白いので時々眺めている。> り易いので用材にならず、まず薪にして燃すくらいのものだろう。何の役にも立たずに老樹にな 話を写している。人あの樹ばかりはね、 ったようである。五月十九日の日記に、成瀬無極『面影草』が引く、幸田露伴の榎についての談 その年の春は、しかし、繁稚慶鬱な問題がつぎつぎ来襲し、両日以外は銭氏の書に親しめなか 何の役にも立たないのだ。頑丈に見えても木質が弱く腐 (727)

露伴のような人が語れば味わい深い言葉だが、書き写したのがわたしでは、ご愛嬌ともいえな (人

を読破せぬ以上、長陽される比較論を、いいとも悪いとも言う資格なない。 崩さ大月かれる。李賀を論じた陪分にだけでも Gartier、の Figuret、は Meddele、の A Re Bandhing J. Wagner, D. K. Laurence, J. M. Murry, E. Spranger, T. Lipps, Lewing, Browson, W. Religh, Amiel, V. Feldman, Durkheim, Delacroix, Ruckin, Horace. etc. NIC VIGIF NES 銭氏の書には、中国はもとより、ギリシャ、ラテン、英、独、仏. さてはサンスクリットの文

めらいを覚え、自らの作業を「学問」と称し得ない。 であり 林太市郎博士に出会ったとき、 その作業こそ学問だ、と思った。以来、 当時はまた「博士」ではながったが、このような人こそ読書 わたしは自らを「読書人」と称することにた

かいで、 にロもう購書の力もない。だのにやっぱり月に二十余金を投じて破書数册をあつめて悦に入って いるとは、おかしなやつだ。>^咄訳 り年の**馨まで、八ヵ月間で、鸚喜費百六十余元、が、善本はない。** 一九六七年四月十六日、鲁辺「壬子日記」から次の一条を抄出している。人しらべると、五月 大きな力のある者だけが手にしうるのだ。現代人の処世に読書を必要とはせず、 北京では古書籍は骨重あつ

か。 てくれる花は咲かごず、枯葉ばかり落としている。 爛として晴れた夜空の星群のようだ。羨しくはあるが、手許においても、読む時間があるかどう 伯説、を与えてくれたが、主は複ほどの大樹にならず、しかし木槿のように老朽し、馬が食べ 十年にった、 魯迅にしてなおかつこの嗤ぎがあったのか、と感じたのだろう。鏤氏が挙げる古巻新書は、 わたしは収拾しえた。破書数册タさえ埃の中にのこし、 非「読書人』の席辺に、またいくらかの〝破書〟を加之た。それらはささやかな 朝出て夜帰る日々を繰返していた。 (728)

むだ口はこれくらいにして、次に銭氏の"筆補造化天無功"論

PIT 在のみならず、学問の大源、芸術の極本についてもまた。一言で道破している。そもそも、天 長吉の高軒週篇に「筆は 造化を補って 天に功なし」の一 語がある、これは、 長吉の精神 心 眼の

ğ

のは、みな天と人とが湊合したのだ(Yome addutur rativae)。おもうに天は一のみ。 純孑として **いう「天エハ人ソレ之ニ代ル」と。『法言』問道篇にいう「アルヒト問ウ. 寂形ヲ彫刻スルハ天** が流行し天工が造化するとき、いわゆる学問も芸術もないのだ。学と術とは、人事の天に 人定へ人間の決意努力)の天にまざり、人心の天に通じることなのだ。『書経』皋陶 ト。曰ク、ソノ彫刻セザルヲ以テへ天トイウ)ナリ、トレーあらゆる学芸の発生した

美ではあ これ。(韓)昌黎の孟東野に贈る詩の「文字ハ天巧ヲ觑ウ」の一語でこれを要約しつる。觀の字行し、その炎は今に至って衰えない。シェクスピアのいわゆる「鏡で自然をつつす」 というのか アリストテレスにおいて発揚され、キケロによって重ねてのべられ、十六、十七、十八世紀に盛 自然だ。芸は人為による。そこで分別が生じるのだ。これを綜論すれば二大流派となる、 下し得て最も妙だ。けだしこの派の説ではかく考之る。 一は造化を師としてのっとり、自然模写を主とする。その説は西方でロプラトンにはじまり、 ij えない。作者はかならずいちと送択取舍の作業を加えるのだ、と。これこそ「齦巧」 **造化は家美を備えるけれども完全なる善** (729)

わななきて意のごとく出たす能わざれば、人をしてこれに代りて裁ちなさしむ」である。 長吉の 美派作者にもっともこれを信奉した。ダンテのいわゆる「造化は大匠の器を製するがことし、手 ュヘール(Jouleut)、ゴンクール兄弟、ボードレール、ホィッスラーはみなその趣旨を悟り、唯 Chrysostem)に萌芽し、プロ子!スに完成し、近世ではベイコン、ムラトリへのweateri)、ジ 二は自然を潤飾し、造化より功を奪うことを主とする。この說は西方ではクリソストム(多よ

\*

得する、というにいたる。これが「天に功なく」「補ってもらわねばならぬ」内之んだ。 補 つべきものは 進 16 天 無功 世界の美は 0 でく、ただ素材があるだけで、芸術によってねりあげられてはじめて美観を獲 一句は、 天成 その要旨をかかげ本質をしめしたとなしつる。 の世界の及ぶところでないと考えるだけではなく、 派の論者 自然界には

またまさに古人を師とすろようなもので、 なぞらえつつ 変化するにほかならぬ。 たからアリスト を傷めないのを修という。それなら自然を離れまるわけではないたろう。 造化を師とする方法は どあかしなものを羅列する 盧多遜、胡釘鉸のたぐい、虚構派もまた牛鬼蛇神、 運用とがつまく融合すれば、 せは、しっかとバド当ろものかあり、バを師として世界を構成してもちゃんと理にそむかぬ、シ 2 らぬ」と。けだし芸の至れるものけ心!欲スル所ニ従っテ矩ヲ踰工スである。天を師とし実を写 かりて自ら補うのだ。天がもし自らへの手で)補うなら人の巧みは凝ひる。造化の神祕と心匠 テレスはいつ「自然を師としてはそめ当然を求むべく、事を写してはそのことわりを究めねばな って裁断 こだわり クスピアがかつていった「人芸は天工を補つに足る。そうして人芸は即ち天工た」と。円通妙 わたしの考えでは、二説は反するようだが、じつは相たすけ、 すぐれたことはではないか。人は天から出た。だから人の天を補つのは、天がへ人の)手を い、
にい、
自然を
模写して、
送択といっなら、
ねりあげ
改める
竟があるわけ
だ。
自心によ lして、修補という。その本性に順ってこれを拡充するのを補といい、删削してその本性 かけた的には射あてても、 彼此を分つこともない。この理に達せぬものが分別 生きた相手に合わせることができめ。写実派は牛尿馬糞な かたろは異なっていても心は けったいなだけで すると、 流派に (730)

趣なし、 **盧王川** 李昌谷もまたへそのそしりを) まぬがれぬ。 へ 拙 訳。 文中の著者注は 省略 した

か、不思議なくらいだ。「筆補造化 っとも、というほかはな が動 題 たのだ、としかいいようがない。 ١.١ いま読 一天熙 功」に髱眼して三十年さきんずる人に、遅れて行 7, 返して、 ついでにわたしの「筆補造化天無功」 初 めて手にしたときの昂奮がなぜだっ きあ を読

ること有らん」へ李白「将進酒」)で、 さしつかえはない。 その一つの大きなあらわれである,従って長吉の技術意識もまた伝统の流れを汲むものといって 用いられる場を見出 て語るのてはなく、 である。芸 A返してみた。『方向』第二号 (1 九五三年八月) に収 人中夏にあっては 万物を造化 術 家 が明らかに するのは確かに天であろう、だがその万 。しかしながらいかに人間とその力を强調しても「天我が材を生ず、必ず用う 芸術家の筆が天のことはを摘出し、 すのが、天比の間に 人間とぞの知 しなけれ . は一切は存すれども無きにひとしい。 天が芸 識に対する信頼はむしろ伝 位置せられた人間の道であった。その限界を破ろうとす 天の指すところを限りとし、天の支配のつち 万物の 170 めるものである の万 統的なもので 物たる意味を見出したのは芸術家 価値を創造するのであ 儒家 絎 Õ) 家 礼祭 ろく の筆 その力の ・
章
重
は を仮っ (7.3)

を胸に蔵する詩人が世に喜び容れらるべきはずがない。事実 「天無功」もまた中夏にあってはこれに劣らめ恐ろべき言葉でなければなるまい。こうした言葉 ヘヨー ッパにおいては 「創造上はごうこったる非難をよび起すに足る恐るべき言葉であった 後代の批評家には長吉を異端と退

るに至っては文字通

~リ破天

、荒の

わざとい

わねばならぬく

当時 るものは少くない。異端としないまでも正統と見なかったことに間違いはないと のわにしか言おうとしたことは、銭氏のいっていることとはまったく別事だったのだ。

**西ちの人の信仰と政治に関係するように、天は中国人のそれに深くかかわっている。** とは同じでない。が、天と native とを同視するよりは、中国人の感性に近いであろう。 god が や異ろ。 つかう材料は似ているけれども、 鉄氏は中国人だが、かれのいう「天」は、ほとんど英語の zative であって、中国の天とはや <天が假の土の人に対する位置はキリスト教徒の神にあたる>と拙文にいう。天とGod (73

**化して権力集中に利用したのが知識人であり政治家であった。** 

中国の古代の人は、天の强威を畏怖しその恩恵を希求したようである。その畏怖と希求を組識

別のものとしなることができる。観念のこの融通性が事物もしく口事実を支配する力ともなるの 不足するところもない。これに対して、観念は、条件によっては大きくもなり小さくもなり全く しくけ事実よりもすみやかに生長し、逆にこれめを支配しはじめる、観念が事物もしくは事実と たが、切りすてられた事物もしくは事実はやはりそのまま存続し、やがてこれが観念に復讎すN> た、事物もしくは事実は、大であれ小であれ、そのものとしてはすべてであって、 余すところも 天への信仰か、組織され観念として成長する道筋で、切りすてつけ加えたのは権力の意思であ 、観念というもの口事物もしく口事実から生れるものではあるが、いったん生れ出ると事物も **捨てられたものは、権力にと、て都合のよくない事物もしくは事実だった。** 事物もしくは事実から何物かを切りすて、つけ加えることによって成長すること 2

意味 を見出す 桶 天への信仰を仮 れに牛鬼蛇 力に 神を筆によって解放すること、すなわち天への信仰の回復であり、 1171 か、 くこと、 た、争 リに午鬼蛇神といってもよい。李質のいう「筆は造化を捕う」とは、閉じこめら 権力によって奪取され天の観念となったとき、 栁 Ł <天のことはの摘出>. しくは事実の中にさまよい入りそこに閉じこめられた。閉 人万物の 価 値の創造>なのだ。 権力に捨てられた天へ 人万物の万物にる じこめられた 0

を認 丰 鬼蛇 めたがるはずはない。これが質のいう「天に功なし」なの 神 0 解放を権力がよろこぶはずがない。権力の作った天の観念が捨てられた万物の 価値

めがれまい。 れようか。 「高軒週」 一篇に限定すれば、そこでの天に右にいつ解釈を主張することは牽舞のそし しかし「苦篁調嘴引」4175 等を玩読し、 質の集を熟視するならば、あるいは リをま

る ように引くけ くものが牛鬼蛇神を嫌うのは故ないことではない。 に見える があったろうことは疑えない。孔子主義の中庸はやはり孔子に由来する。 孔子が経典を删述したという説話は、孔子学派が権力と 結びつく過程で生れたものと推察され 孔子自身がどれだけその読話と近いかけ れど 礼 と 中 鬼 蛇神、 奇誕無趣 ····· 昌谷亦未免也>といつとき、 疑 問 だか、孔子か牛鬼蛇 銭氏は西方の学説詩文を自家薬籠中のも 神の 中の電を批評の基準にお 追放と天観念育成に力 ほとんど孔子の徒 0)

中国 の天にとって代るべきだ>ということはを抄出している。その横に「筆補造代天無功」と朱 カセニ 珥 月 九 Ø ロバ 1 ト・ペイン『毛沢 東 をあ 、る文庫本で読み 人料 学 Ò 普 遍 的 原 理

文庫本を参照しよっとしたか見当らない。果して毛氏自身のことはかどうかもわからな 書しているのは、 う感 しかする。 ものとしても、それを質の語と共通するものとして掲げることを同意するかどうかも、わから けれども同し日に抄出した次の文章をみると、さぎの推測は当らなくとも遠くない、とい 両語の間に共通性があると思ったからであろう。 いまここに書き写そうとして

なつ語として使っていたようである。 毛氏が李貸の詩を読んでいろことはたしかである。しかしまた「牛鬼蛇神! の語を氏は敵には れられた英雄で、彼らは遠い過去の英知をそなえていることに気がついた。 湖 首をかしげていた。そして、 侢 の丘陵を放浪しながら、歴史や小説に農民の諂が登場しないのはなぜだろうとしきりに 休暇をとって村から村へと歩きまわっているさい。 34)

か。あるいけやはり、唯美主義、の墳墓中に閉じこめて忘却すべきてあろうか。 とよぶことかできるなら、革命に関心をもつ人は李賀に注目してもよい、 す,それならは「牛鬼蛇神」こそ、現状打破の根源にあるデモーニッシュなもの、といえないか。 に望ましいものを観じようとはしないようだが、牛鬼蛇神の語によっておのれの好まめものを斥 望ましきものを見、牛鬼蛇身に厭わしきものを見た。孔老二を伐とうとする人たちは、もはや天 こそ現状打破の根源を凝視していた詩人といってよいことになろう。現状打破の永久運動 **孪質が「牛鬼蛇神」にのめりこんでいったとして、それがやむをえざる必然だとすれば、かれ** 「天」もごまごずに使われ、「牛鬼蛇神」もまたさまざまに用いられる。孔子主義者は、天に といつことかできょう を革命

## 佐 藤 春 夫

佐藤 クが ある、 の祝詞 春夫 **雑然とならんでいる。が、** に現 五六のペ 「湊 その あど笠信太郎「日本インフレーショ 詩漫讀妄解しという一文があり、 れたる思想」賀川豊彦長篇 薊 ージの大船 にあ うの リブ 巻頭 表 紙 縮 ŧ 文は 小説「キ 目次 「解散の Ł それをとり 剝 リス ン第 はない、三の六一三一七ページに二段組 がれ **个** 二期 **意** 陽に あげようと思うのだ。 三浦環「私が觀にシャリ 一九鬼 と次 燒 17 の總送挙し 周造「偶然の 雜誌 7 汉 〈 筆者名 造 插 四 ーは 相 和 山山 ヤーピンし け + しがき」に 破 田孝雄玉 珥 11 えて、 . T = n 月 か (7 3

標準もなく雑然と並べて見るだけである。組み合せに多少の變化を求めぬでもなかつたが 問ふことも出來ない。 の稿を引受けたおか ただ好きて漫 きな誤謬をこへ傳へずは幸甚である。これが自分の任であらう。 <支那の詩といふものは ただ春琴抄で暗音 1111 炙 した程度の 讀 げで宿題 んで獨學固陋を愧ちながらも妄りに 註文に もの 疎影の句を見て感歎 少しも學んでゐな 別に を課せられた試験の答案を草する思ひがある。 より 難しい指定 は知らないから是非もない。 l! もないの玄幸、 Ĺ に程度の それ故これを放く解するといふことに出 解いて自分だけは喜んでゐる。誤ってこ2 — 書架玄亂 謪 識者は 者し、 しっと高級なら仕事なら 多少の趣 抽 はじめから笑つて して 讀めさうなの 折から病中で先輩に 味を喚起し 得て大 來ない。 文壇 を何 取 () 合 0

乏しくない答 傳 へて米鹽 **だからであ** に代へる亦生 る。昨 デ、黄 心感の は惡文を賣って生き今は 歎があ るジ 曾 消賜  $\bigcirc$ 料 とし 7 쑗 L Z 禾

種 樹 あげられた作 Ш 陸放翁が「月下作」。一口李白の、二は白居易の作である。三の全文を次に写す。 品品 ij 一、長干行、 = 秦中吟のうち買花、 Ξ. 李長 吉の 一将 進 洒 ۷

事で めたくなった旅客のやうな氣持ちであらうか、自分は白寒天を敬愛し喜ば てとれほど個人的なものかといふ例證 かも ているといふ身勝 局学長吉 みるやうな 気がするのは不 7), 李 ある・ 支 でも 知れない。 琉 白 國を同 壀 那 Ø の方の 錘 貌 ぢ 0 1Ш 筆者がただの氣まぐれであらうかぞれとも故郷から遠い半球へ じくし然もその時代をも同じくしながらまるで人種を別に オに とを示さ + 琥 イ 藝術 珀 ただ白樂天をしばらく繙いてゐてふと李長吉の集をのそいて見たくなったたけの 對 若しこの對 vJ 濃 手な理由 とも してこれ 半球 B もの 言は の民らし 琉璃 無 |で先づ將進酒を養む。決して力作でも雄篇でもないまでもこの鬼才の tt 思議なはかりである。若しかすると亨楽に 门鬼才と呼ばれ. 17 てゐる李長吉は白祭天とは多くの點で好個の對照をする作風であら 論に深入り グを変え い。もつと力作もあ の一つになるかも知れないが筆者はその任でもなく今はそ したら藝術といふものが時代にも國土にも鬱せず飽 琥珀濃カナ 稀質の才を抱いて夭折したこととその ij ij 雄篇も無論 多いが 、對する趣味だけば或 し地上にゐた世紀を距 自分に自分が誇み めではな 來て 故 Ш 1F 〇秀翠玄 風 (V) かし には共通 類 < 拟 て 绐 # 眺 ح 736)

11 龍 傮 旭 酒 鳳 漪 王 逼 脂 珠 泣 紅

酒

IJ

珠,

紅紫

泣な #

皓 羅 吹 齒 氂 悼 鄅 苖 繝 一零鼉鼓 細 膜 腰 圍 兓 笞 風

沉是青春 桃 花 亂 箈 如 紅 將 विव

日

蓉

酒 翻 君 不 到 一終日 劉 冷墳 略 AT 上土 顇

> 歯、笛・憎 意: 鳳滴 青:細: + 順: ラ 鼓:風: # ヲ テ紅紅 擊; 圖: 4 4

花的 ヤ 是:歌: ヲレヒ吹 酪. 雨; 日 、器。 將? 1 フ 如主 = 暮、 ヲ L ヤ

٢

君:枕;沉:皓;雕 羅;龍小 酒 /١ 劉 割より 冷境 終落 上 田、紅 八部: 到ラ 1籀 ス

であ に愛 爲 亂 夢も 育も き、麗詩へ 落 Ø 誇 3 、々たる 17 題 紅 一分に繍 ぎに の自 萷 17 用 大とかげ 細腰 #1 を轉じたところに絶妙がある。 字 然な要求も 憲きなんとしてゐ 似 け Ó たも 幎 グ 0 íŤ 並 な 舞 く春を惛 のを見て 々ならず かは ふ、 0 あら 。公子等は 鼓 珍 惜 圣打 味 難し う しむ公子等が或け ろのを感じて 佳 が L めど ちな 香 いの 無論鐘 文  $\overrightarrow{O}$ も意に 字の美ぱ らす音乗に 用 も今日を限 意に 茎 手に 終日 か 更にこれを逆に受けて酒はさ 忙 17 かリ L 琥 珀 80 酩 1) つれて朱唇 く味覺をそそる哲をこめ 酊 の か珍奇をさへ 7 の色濃や 、ゐる。 はじ 5 春の日 綇 め 一の間 0 かな t 中に 17 ٨ タ寮とてへ 或は 行 と同輩に杯 歡 から皓齒 追 コ 萩 禁の極哀 紅 酒 (7) **(7)** 7 な L 滴 插 絢 を見せて美 たその もの好 盤玄勒 E 爛 1) 委 傷を生じ を その 辯 T: T: 17 極 ろか 酒家 めて 0 次 \$7 ら 人 T 91 17 T わ ろ なと 者が 劉 が 17 せる 料 ŧ 敦 理 9 酒 場 ٣ 一身 桃 穏 ふ、 沢 の用 花 書 笛 (V) あ 狀 Ó (7) ま 3 る

12-13

(737)

でもあらうか。 がら飲むを好しとすとその 散文 と聞くのはその人らしい好みを示してゐて面白いではないか。せめて高等學校位ならまだふさは の土にすら到らない ものを、  **代等は既に** 芥川 が高等學校時代 と悲痛 初老を超えてなけこの句を春毎に愛誦してゐるの口寧ろ自ら笑止である。 な好誌を弄して 一詩集で述べてゐる流である。 沈ん 結ん いや是れ以下の句を愛誦してノートの端に落書し である。ボ ードレ 更に 類を求めたらアナクレオン 1 ル け 一番の 酒 亭で坐域 Ó)

種樹四時愁 樹ヲ種ウ園中冥種樹 園中原ではアンにもつ一つ李長吉の彼とし

樹ヲ種ウレバ四時愁フ・一気中樹ヲ種ウル莫レ・ス吉の彼としては例外の極く平易な五言絶句がある。

獨リ瞳ル南牀ノ月

今秋似

獨睡南

牀

尤もらしくどうだ参ったらうと言はぬげに申し添へて置いてある。何が樹を植ゑたせゐなものか からと述べてゐる。それがごながら窓前の樹のせいであるかのような非理論的なことをいかにも 真實をつかみ出して獨り避る南林に見る月が樹のあるばかりに今秋も去秋に似てわび 老を過ぎてもどうして當分爱誦してもよさてうである。 人皆は樹を種へて四時 人を驚かせるのに、 してゐる。我人ともにこれは同感であらう。然るに彼は突如 かも故も知らぬ悲愁が折ふしいつも同じ姿で心に出て來るのを感じ いふのであるこの平淡に似て幽玄極まる詩を自分にこの上なく愛好 樹を樹うれば四時終かと天邪鬼を言ひつづけてゐるよと思ふ間もなく忽然と とし て樹を種うろ莫 ては何ほと樹のせゐだとも 7 ゐる。 これ (T) **起を慰める友と** れと言ひ出 しく悲しい ならば 5

12-14

(738)

**愁人の姿だけでも自ら描き出してみるがいい。これがこの詩の景をなしてゐるものである。さう** の鬼才たる所以がある。いくら説いて見ても駄目である。直ちに感得しなかったら遂に味解 してこの詩では景は寧ろ邪魔な位煹の沈庸に幽玄なものがあるのだけれども と1中宵に目の上をかすめた月光に目覺めて庭樹の上を刻々に通り過ぎて行く月に見入ってゐる く説得する術 して寳はこっそりと南林に獨睡の恩癡を搖 理窟ではない、 のない詩趣といふこれらの妙境を感ずることが出来ない詩的愚癡 寧ろ詩美は非理 性的な
題
襲
の
方
面
に
多
い
。
理
に
訴
へ
よ
う
と
す
る
や
う
な 川
起
し
て
来
て
わ
っ
く
り
と
越
ち
上
ら
せ
た
と
こ
ろ
に
李
長
吉 は、せめて 、は林 中ひ すべ (734)

詩に葽種樹の形骸だけを摸して失敗したものがあってそれと比べると詩の眞竇を區別するに好都 感じさせられるのに、特にこの五言では理智的な假面を着けてゐるだけに近代象徵詩 合だと思ったのにあったところを忘れてしまってお話にならない。 にも自分の國の名譽にもならないが、 ど接近してゐる。これが西洋紀元ハ世紀の支那の詩だから驚く。いくら咸張つてみても自分自身 李長吉の手法はいつも立體的で効果が妙に心理的なものを捉へるので近代詩と相通ずるものを 西洋の詩なとはだらしのないものだと言ひたくなった。宋 2紀の支那の詩だから驚く。いくら威張つてみても自分自身 15 味に よりま

んど諳記するほと繰り返し読んだようだ。「將進酒」については、 維 ずだが、それでもたぶん同じ年の夏か秋には読んでいた形迹がある。たいへん感心し はだいたい古本でしか買わなかったから、この「改 造」も発行の月に手に入れたのでは しかし、そのつろ佐藤群に満 ほと